『十字架の上に』（ヨハネの福音書 19 章 13-24 節） 2023.3.12.

＜はじめに＞ いよいよイエスは十字架の上に架けられようとしています。その物語で繰り返されているのは「ユダヤ人の王」であるかどうかです。正しさを主張する者は常に生贄を要求し、裁判で刑場で、なおも押し問答が続いています。その狭間でイエスは十字架の上に架けられました。

Ⅰ　拒絶される王(12-16)

①訴えるユダヤ人(13-16)

ピラトはガバタ(敷石)でイエスの裁判を開始します。罪状はユダヤ人の王としてローマへの反逆騒乱です。十字架刑を叫ぶユダヤ人たちにピラトが皮肉混じりに返すと、祭司長たちは「カエサルのほかには、私たちには王はありません」と言い張り、結審となります。

②ユダヤの王制

王制では、王統によって就位し、民はそれを受容するか拒絶するかです。ユダヤ民族の王は神が選んだ王統(ダビデの子孫)のはずです。しかし、イエスを十字架につけるために、彼らはいとも簡単にそのことさえ投げ捨てたのです。

③あなたの王は？

イエスは神の子、救い主、王として世に来られました(18:37)。そのイエスを信じるか、信じないかをテーマに本書は書かれています。信/不信の決め手は何でしょう。ユダヤ人は自分の正しさ・理想から拒絶しました。かたやイエスの生き様は聖書を裏書きしています。

Ⅱ　十字架につけた（16-22）

①ゴルゴタ

イエスは自分で十字架を背負って、エルサレム市外の刑場に行かれ、他の 2 名とともに十字架につけられます。ピラトは罪状書きを十字架に掲げますが、その文言にユダヤ人は異議を唱え抗議します。彼は「ユダヤ人の王」ではなく、「自称した」に過ぎないと。

②ピラトの意地

イエスは自らユダヤ人の王を名乗ることはありませんでした。ピラトも尋問で確認済みです(18:36-37)。むしろ民がそう呼んだのです(6:15、マタイ 21:9)。なのになぜピラトはこのように書き、それを頑なに変えなかったのでしょうか。

③書いたままにしておけ(22)

ユダヤ人の本心はピラトも察知していました。イエスを殺すためにカエサルを王と認めただけです。だからあえて彼らを逆なでする文言を記しました。最後の抵抗です。3 言語で記された文言は当時の世界を網羅し、今も十字架の上に架けられています。

Ⅲ　聖書は成就する

①衣服を分け合う(23-24)

十字架刑を執行するローマ兵士には、役得として犯罪人の衣服を得られます。兵士は 4 人一組だったので、上着は 4 分しましたが、一枚物の下着は貴重なのでくじ引きにしました。彼らの行為は、知らずにして詩篇 22:18 の成就となりました。

②逆説的な成就

ピラトが書いた「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」の罪状書きは、後に使徒たちがイエスの福音を伝える決まり文句となります(使徒 2:22,36、3:6,14-15、4:10)。一方、カエサルを王としたユダヤ人は、約 40 年後にはローマの手でエルサレム陥落・離散に遭います。

③あなたがたが信じるため(20:31)

十字架の絵は複層的です。それぞれの立場と思惑で見え方も変わります。それはその人の態度と心までもあぶり出します。聖書は予め神の計画と救いの道を提示し、逐一それは実現しています。本書はそれを明らかにし、イエスを信じるようにと今も招いています。

＜おわりに＞神は罪なきイエスをを罪人であった私たちのために十字架に渡されました。それによって私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます(ロマ 5:8)。この一見矛盾・理不尽と思われる出来事を通して、私たちの心と生き方が探られます。この方を信じますか。（H.M.）